

第3回 令和の魅力と活力ある県立高校のあり方検討委員会 議事概要

1 日 時 令和4年2月9日(水) 13:00~15:00

2 場 所 富山県民会館 401号室(各委員はオンラインによる参加)

3 委員出席者 金岡 克己 牧田 和樹 伊東 潤一郎 尾畑 納子
河上 めぐみ 近藤 智久 品川 祐一郎 白江 勉
白江 日呂雄 鈴木 真由美 能作 千春 堀井 鉄也
本江 孝一 本島 直美

4 会議の要旨

司会が開会を宣した。

講 演

○ 「高校におけるSTEAMを通した新しい学び」

アドバイザー 大島 まり 氏

(東京大学大学院情報学環/生産技術研究所 教授)

質疑応答

(委員長)

今、新型コロナウイルスで、政治の世界では、どうして日本発のワクチンがないのかという議論が出てきていますが、私が聞き及ぶ範囲では、モデルナ社の技術は大変優れています。2年前に新型コロナウイルスの遺伝子配列が発表された後、わずか3日間で、今のワクチンの原型を設計したということです。これが本当だとすると、大変なサイエンス的な技術力がないとできないと思います。残念ながら、アメリカとはもともと差があったわけですが、この差がさらに、或いは中国にも遅れてきているのではないのでしょうか。やはり国が、この科学技術全般への力の入れ具合が少し不足しているのではないかとこのことを危惧しています。この辺り何かご意見があれば、お聞かせいただきたいと思います。

(アドバイザー)

恐らく冒頭のところに関係してることと思います。2点あるのかなと思います。一つは今の先生がおっしゃったような科学技術の力、いわゆる、サイエンスです。この点はアメリカ、今、中国が追い上げていますが、日本が劣ってるかいうと、必ずしもそうではないとは思いますが。その点が2点目と関係していて、やはりその科学、サイエンスも含めて、社会あつての科学技術である、ということです。

社会的な価値については、今、日本が持っているサイエンスをどのように発揮するかが、大事となります。そのため、1点目のサイエンスの底力として、グローバルに日本が劣っ

ているというよりは、そういうわけではなく、どちらかというところ、2点目の、社会における活用として、どうしていくかっていう点において、発展途上であるのが日本の現状かと思っております。STEAMが新しく重要なところであり、Scienceだけではなく、Technology、Engineering、そしてMathematicsにそれにArtsが加わることによって、社会のニーズを踏まえて、どのように科学技術を社会で利用できるように転換していくこと、それが大事になってくるかと思っております。実際の教育の現場で、いきなりそのような教育はできないので、トレーニングが教育として必要になってきます。そこを強化していくために、STEAM教育そしてそれらも含めた探究活動が大事である、そのことが第6期科学技術イノベーション基本計画のポイントかと思っております。

(委員)

確かに大学としては色々な産学連携も含めて、色々な研究でもやっているのですが、現場ではSTEAMという考え方は非常に重要で、現場ではそういう動きをしていると思っておりますが、そこを、今回、この委員会は、高校ということなので、高校の学びの現場にどのようにして落とし込むかというのは、なかなか悩ましく、我々も、高大連携という話をした時には自分の研究テーマをうまく考えて、そこからどうやって高校生に考えてもらい、何か学びを得られるようなテーマはないかと思ひ、色々考えています。そういった、今は大学でしたが、大学に限らず、産業であったり、産業界だったりとか自治体であったりとか、そういったいろいろな機関が、今高校で学んでいる生徒たちに、どういう形で主体的な学びを導くかということに対して、何かサジェスションがあれば教えていただきたいと思ひます。

(アドバイザー)

非常に大事な点であり、いわゆる学校の、高校の中でそれらをどのようにしていくか、ということだと思ひます。リサーチクエストとしてどのように落とし込むかということになります。テーマ設定と計画です。この部分で、例えば大学であったり、自治体、企業であったりとか、テーマを持っていらっしゃると思ひます、それらをどういう形で落とし込むかっていうのが、一番キーなのかなと思ひます。高校生が自分なりのリサーチクエストに落とし込むということが、本当大事なのかなと思ひます。UTokyoGSCにて私達がやってきたことで見えてきたことが、先生の質問にも答えられるのかなと思ひます。探究活動における、テーマ設定、そして学校に閉じない学びも大事です。リサーチクエストに落とし込んだが、学校だけでは解決できないとき、そのようなときには例えば専門家と連携することで、おっしゃる通りに、高校現場における高大接続が、探究活動でもうまくできるのかなと思ひます。反対に高校の先生から、大学だけじゃなく、いやそうじゃない、こうしなきゃできないっていうことがあれば、高校の先生から色々ご意見いただければありがたく思ひます。

(委員)

本県には探究科学科と申して、理数科学科と人文社会科学科を設置している学校が3校あります。もともと理数科が設置されていた学校で、その課題研究の流れを、理系だけで

なく、文系にも取り入れてやっている学校になります。課題研究の発表会などを行っていますが、この課題研究においては、先ほど大島先生からお話があったリサーチクエスト、つまりテーマの設定がもっとも大切であって、かつ難しいところであると感じています。生徒の感じる疑問や、課題を課題研究のテーマに仕立て上げる過程そのものが、課題を分析するものになっていると思いますし、その設定については、大学の先生方にご指導やご助言をいただきながら進めています。こうした大学の先生方のご指導は大変ありがたいと思っています。また課題研究というのはどうしても少人数であるものなので、学校の教員の数が必要になってきます。こうした課題研究のテーマ設定においては、大学をはじめ外部の方々の力を借りていくということも大切な観点であろうと思っています。特に探究科学科においては先生方を多く配置していただいているのですが、これを今後、普通科に広げるとなると、そうした連携が大切であると思います。

(アドバイザー)

おっしゃってるように、大学のサポートも必要かなと思う一方で、実際に探究活動続けていく場合は、少人数になるため、サポートする人材が必要になってくると思います。文科省では、サポートする人材をどうするかって言う議論も、今検討されてると思います。そのようなところも強化しながら、うまく探究活動とともにカリキュラムマネジメントを進めていくことができると、新学習指導要領の円滑な実施にも繋がるんだなど、お話をうかがって感じました。

(委員)

循環する学びの構築、学びというのがすごく印象に残っています。富山市で、循環型の有機農業、農業経営をしています。大島先生のSTEAM教育の研究の中で、農業はサイエンスに入るのかとは思って聞いていました。先ほど事例の中で、実際の現場のやりとりで工場に見学に行くという例があったので、何か農業の現場や、農業で実施事例のような、もしくは、先生が「これができるのではないか。」と思うようなことがあれば伺いたいと思います。

(アドバイザー)

実際にですね、私、専門分野がちょっと機械系っていうことだったんで、工場とかも、事例で出したんですけど、実を言うとUTokyoGSCというのは、東大全学でやってるんですね。なので農学部も加わっていただけてるんです。なので、ぜひそういう訪問体験とか本物を見るっていうので、おっしゃったような機会があれば、それはもう高校生にとって非常に本物体験として貴重なことになるのかなというふうに思ってます。ちょっと東京の高校生がそちらに行くってのは難しいんですけど、ぜひ富山県で、実際に河上さんがそういう形でやっているのであれば、もしかして、そういうワークショップ、最初はワークショップでもいいんですね、なので、やっていただくと非常に、何ていうんですかね本物体験、現場のそういう、どういうことが課題になってるかっていう、生の声も聞けると思うので、学習としても非常にいい学習になるんじゃないかなというふうに思います。

(委員)

今日伺うまでは、何か高校教育に対して力になれることがあればという受け身な感じにいた自分が、こういう形で関われるなら、現場の方も、こちらではこういう学びであったり、機会であったり提供できるというふうに考えてみたいと思います。富山県の高校で採用されるかは別として、富山でも何かしたいと思います。

(アドバイザー)

実際にですね、私、専門分野がちょっと機械系っていうことだったんで、工場とかも、実例で出したんですけど、実を言うと UTokyoGSC というのは、東大全学でやってるんですね。なので農学部も加わっていただけてるんです。なので、ぜひそういう訪問体験とか本物を見るっていうので、おっしゃったような機会があれば、それはもう高校生にとって非常に本物体験として貴重なことになるのかなというふうに思ってます。ちょっと東京の高校生がそちらに行くってのは難しいんですけど、ぜひ富山県で、実際に河上さんがそういう形でやっているのであれば、もしかして、そういうワークショップ、最初はワークショップでもいいんですね、なので、やっていただくと非常に、何ていうんですかね本物体験、現場のそういう、どういうことが課題になってるかっていう、生の声も聞けると思うので、学習としても非常にいい学習になるんじゃないかなというふうに思います。

(委員)

STEAM型の教育とか探究型の教育ということで、実現していくのはすごく大切なことだと思いますが、どの程度の子どもたちにどの程度のことをしていくというのは、どういうふうな考え方でしていけばよいのでしょうか。例えば、先生の大学のよう優秀な学生たちならば、先生のお話を十分理解できて、行動できていると思いますが、やはり中にはそうでない子もいると思います。実は、中小の製造業、ものづくり機械系の仕事をやらせていただいているが、なかなかやはり、そこまで優秀なお子さんたちを実際採用して仕事をしていただくということもできない中で、こういうお子さんたちが自分のところにも来てもらえればありがたいとは思いますが、なかなか難しい。それでも、すべての子ども達に同じような形で教育をしていくためにはどんなことを考えてすればいいのかヒントがあれば教えていただきたいです。

(アドバイザー)

非常に重要かつ難しいご質問ですね。参考になるかわからないんですが、今日は探究が主にはなってはいますが、先ほど申し上げた、現行の学習指導要領に応じて、このようにタイプ別に応じて教育プログラムを展開しています。先ほどの探究活動は、タイプ3になります。一方おっしゃってるのは、タイプ1とかタイプ2だと思います。探究活動のようにガッツリしなくても、例えば、何らかの形で先ほど申し上げたようなワークショップであったりとか、あるいは、気づきなような形での学習の場の提供であったりとか、そこから進むことによって、先ほどお見せしたようなワークショップなど、を行うことによって、これは1日のワークショップですが、探究まではいかないが、このような学習機会を与えるなどはできるかと思います。タイムフレーム、あとは、対象となる高校生のニーズに合

わせて、様々なやり方はあるんじゃないかなと思います。私達はこのような研究会を行っています。企業の方も来ていただいていますし、高校の先生方、小学校、中学校の先生もいらっしゃるの、ニーズに合わせて、様々なワークショップもやっていますので、研究会を通して、試みることもできるのではないかと考えております。

議事事項

- 普通系学科・総合学科の現状と今後のあり方について
- 様々なタイプの学校・学科のあり方について

事務局から資料に基づき、本会における検討事項の確認と検討に当たって参考とする事柄などについて説明した。

(委員長)

この資料についてのご質問はありませんか。それでは、普通系学科・総合学科について、皆様からご意見を賜りたいと存じます。

(委員)

この普通系学科と総合学科について一番大きな課題は、3ページの現状と課題の「入学者の学力層が従前より幅広くなっている」ということだと思います。それが広がっているがゆえに、中学校での進路指導で、中学校の先生方が適切・的確に高校の特色、普通系学科と総合学科の違いや、そういったことが十分に理解されているかどうかという問題も絡んで、志願倍率等々に、いろいろな影響、顕著な差が出てきているのではないかとこのように見えています。今回、我々のテーマは令和の時代に即した高校のあり方ということなので、逆転の発想ですが、普通系学科とか総合学科ということにこだわらない方が、これからの時代には、もしかしたらいいのではないかとこのように考えています。非常に大胆な言い方かもしれませんが、すべて普通科にしてしまっ、先ほど申し上げたように、一番の問題である学力層の広がりに対して、アダプトしていくという方針が、これからは一番大切ではないかというふうに思いました。

(委員)

今ほどのご発言を受けて、本当に、中学校で進路に向けて、いろいろな子ども達の相談を受ける際に、ニーズが多様になっているというか、子ども達自身も決めあぐねている部分があるのではないかと思います。そういった意味では、私としても、前の会議の時にもお話しましたが、やはり各学校の探究的な取組みというの、学科や学校を超えてということであれば、地域性や取り組むテーマとかそういったことも、進路選択の一つの材料になっているのかと思っています。確かに現場の声を聞いていると、総合学科とコースも含めた普通系学科を有している高校との明確な区別、そういったところが見えにくいというような声も聞かれるのは現実だと思っています。

(委員)

入学者の学力層に関連してでございますけれども、この学力層って、何を基準にしているのか。だんだん受検者の人数が減ってきて、それ以前と比べると幅広くなったという意味で、これはどこの高校にも同じことが言えてるんじゃないかなというふうに思っています。そんな中で、今、生徒数が減ってきてる中で、従来の学区制という、縛り、緩やかな縛りがあると、どうしても集める数が決まってくる。そうすると、これまでに比べると何かこう低くなってるような気がするのかなという感じがちょっとしました。これはそもそも、生活の環境も変わってきて、従来、家庭で補ってきたようなことも、どんどん失われ、総合的な学力がやっぱり低下してると、全部にいえるのではないかなというふうに思っています。これを今後どうしていくかということが大事だろうと思っています。普通科っていう場合に、私もいくつかの高校で、取組みを拝見したり、手伝わせていただいておりますが、やっぱり地域と強く結びついて、活動されているところでは、新聞に載ったり、いろんなことしながら、その活動が比較的に見える形になってるのかというふうに思っております。小学校、中学校の先生や子ども達、あるいは、高等学校の先生たちも、いろんな他校の、取組みをしっかりと情報収集していただきながら、学校そのものを作っていくというような視点がもうちょっと必要なのかなと思っています。いずれにしても、先生方の数が足りないとかいろんな話も先ほど出ておりましたけれども、そういった課題も前提にしながら、新しい取組みとしてその学校の特色、地域の特色を十分に考慮していくというのは、今後考える一つの基準にさせていただけたらいいのではないかと考えておりました。以上でございます。

(委員)

先ほどの学力層のお話もありましたし、現状と課題の下から3つ目のところに、中学生やその保護者に学習内容等が十分に理解されていないコースもあると書かれています。つまり、こういったイメージで高校に入ったけれども自分の思い描いた高校ではなかった、学力も含めてということで、もしかしたらドロップアウトする生徒もいるかもしれません。そういったことに備えて、高校の特色というお話もありましたが、授業の様子などがわかる手だてがないかなというふうなことを考えています。例えば、中学校の教員が小学校の授業を分かっているようで分かっています。小学校の授業が、中学校の授業をどれだけ見えているかという、十分に見えていないという課題もあります。同じようなことが言えて、高校を学力だけで選んでいる保護者あるいは生徒があるかもしれません。そこに、高校の特色が一番大事な授業という形で、例えば授業DVDもあるかもしれないし、配信することもあります。そういったものの発信の機会がたくさんあれば、生徒あるいは保護者も選べるのではないかと考えています。

(委員)

中学生が進路を決める場合には、その高校で何ができるのか。それは生徒の活動であり、学校行事であり、部活動であり、そして何を学べるのか、授業内容です。保護者は、どんな力をつけてもらえるのか、卒業後の進路に際して、支援はどんな支援を得られるのか、というものを考えて決めるということが多いようです。今、コロナ禍の中で、オープンハ

イスクールに少し制限があったり、あるいは実施されない学校があったりします。今の状況だとこの高校で何ができるのか何を学べるのかが、残念ですが少し、子ども達にはわかりにくいのかと思います。進路のしおり、パンフレットはいつも通り変わりませんが、ホームページ上での動画や写真とかそういうものでも構わないので、さらに充実して、またオープンハイスクールをもっと柔軟にしていただけると、子ども達が高校の様子を分かり、進路選択あるいは「総合学科がこういうところで。」というふうな意思を持って進学できるのではないかと思います。

(委員)

保護者として、中学3年生がどの高校に進むか決める直前に高校説明会ということで、中学校に高校の方が来られて説明をされます。夏ぐらいにはオープンハイスクールがあって、いろいろと学校を回ることがあります。先ほどもありましたが、その学校はどういったことをしているかということが、なかなかわかりにくいところもあるので、そういった意味で、リモートみたいな形でもいいので、何かもっと説明会を数多くして欲しいと思います。一番いいのはオープンハイスクールの前に、その学校の魅力を伝えていただけると子ども達も、学力以外にも興味を持つことが出てきて、オープンハイスクールの参加の方も、自分たちの興味を持った参加になり、興味を持って学校を見るので、またその幅が広がると思います。子どもが最後に、学校を決めるのですが、親の方も説明会と一緒に聞いて子どもと話し合うので、説明会がもう少し早く、数多くあれば、魅力が伝えられます。進路を決めるにあたって、高校に入ってから、思った学校じゃなかったというよりも、色々な情報を得て、進路を決めた方がよいと感じました。

(委員)

事例としてご紹介させていただきたいと思いますが、総合的な探究の時間における課題解決授業ということで、昨年、高岡高校の協力をさせていただきました。その時に、「100年後も伝統産業を残すためにはどうしたらいいか」と、「女性が伝統産業の中で活躍するには何をしたらいいか」というとても難しい問題に向けて、積極的に取り組んでいただき、とてもいい提案を中間発表、最終発表としていただきました。とても感心をしたのですが、残念だったのが、プレゼンの力です。高校生ということもあって、恥ずかしいとか、人前で緊張するとかは当然あるとは思いますが、同時に県立大学や東京の大学とも同じように総合学習の協力させていただく中で、高校生の考える力に驚いたとともに、もう少しプレゼン能力、発表能力、人前で発言をするというところに対して、サポートできる環境が必要なのではないかと強く感じました。私の父もよく言うことですが、海外は自分の商品を紹介するのがすごく上手で、プレゼン能力も高い。しかし、日本人は100点のものをちょっと謙遜して、話を80%にしてしまうような文化があると言います。やはり小さい頃から、それは小中高、大学の教育現場の中で、自分たちが考えたもの、自分たちがPRしたいものをどれだけ強くアピールできるかというのは、企業に入ってから、とても大切になってくると考えています。

(委員)

今取り組んでいらっしゃる新学習指導要領であり、探究活動は、素晴らしい取り組みだと思っているので継続していただきたいのですが、富山県特有の考え方というのを感じていて、やはり県立至上主義や、学力が、御三家に入ったらいいのではないかと、そういう形で考えられているので、どうしても学校を選ぶというよりも、自分の学力に応じて高校を選ぶという習慣があるというふうに思っています。その中で、スクールポリシーの策定とか、様々な取り組みがあるというふうに聞いているので、この学校に行ったらどのようなことが学べるかといったPRを、もっと強くしていただきたいと思います。今の中学生、高校生というのは、どうしても学力によって行く学校を選ぶ習慣があるので、そこで何を学べるかというのが、後になっているというふうに感じています。ぜひそういったスクールポリシーなりといったものも、アピールできる体制を作っていただければと思います。

(委員)

STEAM教育のお話を伺い大変感銘を受けました。まさに我々経済界、企業活動の中でやらなければいけない、またやっているつもりのことですが、こういった時代の変化や環境変化を見据えながら自ら課題を設定して、様々な基礎的な情報やデータ、論理思考をベースにPDCA、Plan、Do、Check、Actionを回して、一つ一つ成果に繋げていく。こういう取り組みこそまさに企業活動の中で必要なことであり、そういったことを、将来を支える高校生、大学生に対して進めていただいているということに感謝申し上げたいと思います。また、富山県の高校においては、早期に探究科学科というコースを設置して、その課題解決への取り組み、教育を進めていただいているということは素晴らしいことだと思いました。そういう中で、やはり、STEAM、Science、Technology、Engineering、Mathematicsという意味では理数教育というところをこれまで以上に幅広く学生の皆さんに身につけていただける機会を提供していただけることを希望します。IT化、デジタルトランスフォーメーション、様々なテクノロジーの変化と、単に生産性上げるというだけではなく仕事の仕方、働き方自体が大きく変わっている時代なので、STEAM、Artを含め、理数的な素養というのが、これからの社会では必須になってきます。個人的には高校の普通科で文系・理系の分かれるタイミングが、自分の経験では、少し早いと思った1人です。例えば文系を選択して、大学入試のためにそれなりの時間をかけなければならない中ではありますが、理数系の知識を、ないしはこのSTEAM教育的なことも身に付けてほしいと思います。学生の興味からいって難しい場合でも、アクティブラーニングという取り組みもあります。やはり、自ら考え、自ら問題意識を持って主体的に学び、考え、実践する、それをまとめてプレゼンする。先ほど(能作委員)の話もありましたが、そういった取り組みをできる学生を1人でも多く育成していただければ経済界にとっても日本社会にとっても、大きなプラスになるものと思います。

(委員)

今のご意見もそうですが、その前のご意見を踏まえ、先ほど、学力が広がってきたと申し上げましたが、極端に言うと、二極化していると思っています。つまり、いわゆるできる子と、できない子というのが、どんどん大きく差が開いてきている現状があります。例

えば今のSTEAM教育にしても、ベースは基礎学力です。基礎学力がちゃんとしていないと、探究する力も実は発揮できないわけで、学力のある子たちをさらに伸ばしていく取組みも必要だと思っています。そういう意味では、都立高校が非常によい取組みをしていると思っています。東京都内は私立高校がかなり占めている中で、都立はどうしているかというと、例えば日比谷高校などは、共通の入学試験を使わずに、確か国語と数学と英語は独自に作問をして入試をしています。都立だからといって、全部同じ問題を使って入試をするなどではなくて、その中でも工夫をしながらより学力がある子ども達を引き上げていく取組みをしています。最初に申し上げた「総合学科をやめて、みんな普通科にしたらどうだ。」というのは、98.8%の進学率の中で高校にみんな行けるのですが、本当に高校の履修内容を学べるかどうかという子ども達もいると思います。そういった子ども達も、やはり高校の時に、助けてあげるといえるか、学力を上げてあげる取組みも必要だと思っています。そういった観点からやはり高校の再編というのは、していかなければならないのではないかと思います。

(委員)

事務局に、入試について確認したいことがあります。富山県の普通科の高校入試に推薦という枠は取り入れていないのでしょうか。

(事務局)

普通科の入学者選抜推薦については、コースで実施をしています。したがって、コース以外の普通科では実施をしてない状況です。

(委員)

コースというのは、例えば富山、富山中部の探究科学科。

(事務局)

探究科学科は実施していません。コースというのは資料2ページの右下に記載しているのが該当校です。

(委員)

富山北部の体育や、呉羽の音楽。他にも私立とか、工業とかで、もちろん推薦という形がある。先ほどから、まず何を基準として子ども達を評価しているのかと考えています。その基準は学力。学力は共通に測られるものだと思うので、その点数によって優劣というか順番がついてきます。この評価だけで、私も理数科に行かなかった、行けなかったのは、多分理数が弱かったことと、偏差値が足りなかったからだと思います。別に文系の何かを選択して普通科、何かを求めてそこに行こうと思ったのではなく、学力に応じて行きました。学力で評価されるのは悪いとは思いませんが、これからの時代はもしかしたら、この評価以外の方法も必要ではないでしょうか。学力、点数で測っているうちは、その子どもの可能性はその点数の中に収まりがちです。周りは可能性を思っている子ども本人が、その評価を数字で見るので、自分の位置を、「よし頑張るぞ。」と思う子と、「自分はで

きないんだ。」と思う子と、その枠組みがはっきり出るのが、この点数評価の良いところ悪いところ両方あると思います。しかし、それ以外の評価で何かこう、子どもの探究心というか、学びたいという心を引き上げることはできないのかと考えていました。普通科に推薦を取り入れていない理由はあるのでしょうか。

(事務局)

以前は、普通科にも推薦を実施していた学校がありました。平成17年度あたりから県議会でも公平性の確保が指摘をされ、検討した結果、平成22年度選抜頃から普通科で推薦を取り止めた経緯があります。

(委員)

推薦というか、要は学力以外に、そこで学んでみたい理由などが子ども達の中にあるなら、そういうところも伸ばせるような仕組みも入れていけないものだろうかということで発言させていただきました。

(委員長)

推薦の話がありました。確か私立の大学・短大だと推薦入学の割合がかなり高い。確か文科省のご指導だと、「多くても5割にしろ。」という話のようなのですが、実際は、早稲田大学の総長も推薦の入学者を5割以上に増やすことを目標としているというようなお話もあります。そして、現実に推薦入学で入ってきた方が、やる気があるというか、そのあとの成績もいいというような評価がされている調査もあるようです。従って、日本は長い間、子ども達、社会の人口がどんどん増えてくる中で、大学のキャパが必ずしもない。そこで入試がすごく大きく問題になったわけですが、例えばアメリカの大学なんかだと、結構入りやすくて、そのあと、勉強する気がない人は、どんどんドロップアウトしていく。そういうような仕組みに変えていいかわかりませんが、あまり入試における公平さは、何を持って公平と言っているかわかりませんが、ただのペーパーテストで知識を問うだけで、それが公平だと必ずしも思いません。まさに探究型といいますと、チェックすべきはもっとベーシックな知識であって、解法を覚えていけば解ける、解法がなければぜんぜん解けないというような問題が多い中で入試を行っていくような現代の制度は、本当にいいのかなのか、私自身は疑問に思います。特に大学・短大は定員でいうと、高校もそうですが全入に近い時代です。そもそもこの入試は、何を測ろうとして、何をしたいのかという、その高校、大学、その設置者の意識そのものがもしかすると変わっていないと、各委員がおっしゃられた、中学から高校、どう入ってくるのかというような問題に対する解がなかなか見つからないのかもしれないと思います。ただ、日本は公平性にするさい国ですので、すぐにできるか分からないですが、人口減の中での入試のあり方、この前も大学入学共通テストでカンニングがあったということで、大問題でしたが、非常に大きな課題として考えていく必要があると私自身も考えております。

ここで欠席された委員の方々からもご意見をいただいているので事務局から読み上げをお願いします。

(委員：事務局読み上げ)

地域との連携について、高校で地域と連携するということは、企業と連携することであると思います。待ちの姿勢ではなく、高校自ら大学や産業界の連携の取組みに積極的に参加していくのかどうか、企業と接点を持つことで初めて学科のあり方が見えてくるのではないのでしょうか。検討資料の中で、特色ある取組みについて項目、キーワードが挙げられ、様々な活動がなされていますが、単発になっていないのでしょうか。それぞれを点として実施するのではなく、もっと繋がりを持って考えるべきです。戦略的な思考をもとに全体的な学びに繋げることが必要だと思います。県として地域連携をキーワードとしたビジョンを持ちそれになかった明確な目標設定と、何をもって達成したといえるのかを明文化し、わかりやすい形で県民に公表すべきです。またそれらの途中経過、成果を第三者に評価してもらうことも必要なのではないのでしょうか。

(委員：事務局読み上げ)

県立高校の未来を創造するための大きなくくりで見据え、生徒の実態をしっかりとらえながら、教育内容と学校教育の姿を創造することが必要であると思います。前回同様、学校の課題や特化すべきことは学校評議委員会を踏まえて、その内容について検討され、学校評価等において明示されていると思います。現況の問題点や課題を明らかにし改善するための方向性を見出すことが重要です。例えば近年県立高校の一次学力検査における定員割れが続いてどのようにとらえているのでしょうか、また、新川地区、砺波地区から学区を超えて進学する生徒の実態はどのようにとらえているのでしょうか。現場では本来受け入れてこなかった生徒層まで受け入れざるをえないことにより、今まで同様の教育の質がしっかりと提供できているのかということです。

(委員長)

皆様からも様々なご意見をいただき、事務局の方でお考えをまとめていただけるものと思います。

続いて本日の議題に従い、様々なタイプの学校・学科という考え方がありますので、これについてご協議いただければと思います。それでは、事務局の方から、まず、中高一貫教育校についてご説明をお願いします。

(事務局資料説明)

(委員長)

それではこの中高一貫教育校について、皆様からご意見をいただきたいと思います。

(委員)

一つ質問をさせていただきたい。7 ページの入学選抜の中学入試の欄で、設置者が定めれば学力検査を行うことができるということになってはいますが、この場合の設置者というのは、県内でいうと、市町村の教育委員会ということでしょうか。

(事務局)

県立ということになれば、県の教育委員会ということになります。

(委員)

中高一貫は大賛成ですが、ぜひ、併設型で学力選抜を行っていただき、そういう学校を作っていただきたいというふうに思っています。

(事務局)

国の方で決められていて、学力検査を行わずに、適性検査という形になっています。過度な受験競争ということになってしまうので、そういう点も考慮しながらということになると思います。

(委員)

今の点で、誤解がないように。7ページの資料にあるように、中学校から矢印が出ていて、学力検査を行わない入学者選抜というのは中学校に入る時、あるいは中等教育学校入るときはそうです。しかし、今お話が出ている併設型においては、高校入学時にも学生を取るということになれば、入学者選抜、学力検査ができます。そこは二つ区別があるので、誤解がないように発言しました。

(委員)

私もどちらか言いますと、全国でないところが2県しかないということではなくて、そろそろ一貫の教育があってもいいのかなというふうに考えている1人です。いろんなタイプがあるようですけども、ただこれまでの議論でも、作った方がいいのではないかと考えても、実際に具体的に作るとなるという具体論のところ、足踏みをされてるような印象受けました。中学から高校への学力の問題、先ほど出ておりましたけれども、富山における地域に拠点となるとやっぱり高等学校、あるいは中学と高校連結しながら、その地域をつくっていくという視点で作っていく、地域の活性化の拠点になるという意味で、併設型を作る、あるいは、すごく中心部に普通科が多い、そういうのを少し整理するという観点でも、少しチャレンジかもしれないけれども、新しい教育の環境として、作っていく方向で進めていっていただきたいというのが率直な考えでございます。実際作るとなると、失敗はできませんので、ものすごく考えないといけないかもしれませんが、市町村と、県との連携も踏まえて、少子化への対策としても、前向きに考えていくことが必要なんじゃないかというのが私の意見でございます。以上でございます。

(委員長)

中高一貫校に何を皆様求めていらっしゃるかによって、いろいろ意見が分かれてくるのかなという気がしています。過疎地域で、小中高もずっと一貫していかないと難しいという所と、中学、高校とエリート的な教育というか、おそらくこの中高一貫校の発想。私はわかりませんが、大都市圏で私立が中高一貫の中高を作り、そこが少なくとも進学実績を上げている。そういうことに対して、公立も何か考えていこうという、何が経緯なのか、

正直わかりませんが、何を求めるかによってこの中高一貫校を設置するか否かの議論になってくると思います。そこをもう少し、かなり明確にしていただかないと議論が発散してくるという気はしています。それがおそらく、過去の経緯で、常に賛成・反対意見が出てきたところについては、中高一貫校を設置する目的について明確にされてないというところが、議論が発散してきた理由ではないかと感じています。

それでは、そろそろ、この議論だけしてもまた色々なご意見が出るかと思しますので、最後にもう一つの国際バカロレアについても皆さんのご意見を賜りたいと思います。事務局の方から資料の説明をお願いします。

(事務局資料説明)

(委員長)

国際バカロレアという概念自身、皆さん、あまりお聞きになったことがない方も多いかと思いますが、9ページ、10ページの資料をご覧になって率直な意見を賜ればと思います。

(委員)

色々な意味で、国際化、ないしは異文化、海外、そもそも外国語でもいいのですが、興味を持つ学生に、早期にそういった機会を提供することは選択肢の一つとしてあり得るのかと思います。昨今の国際化に、ないしは留学希望者が減っているなど色々な日本が抱える課題、このままだと国際競争力がどんどん、経済的にも劣っていくことになるでしょう。賛否両論あると思いますが、労働力や消費者の確保という意味も含めた国際化ということは、国の選択肢として今後出てくる可能性が高いと思います。そういう意味では、先ほどの中高一貫校の話も、エリート教育という意味では現状の富山県に存在する各学校、附属中学も含めて、あえて作る必要がこれからの少子化の中にあるのかと思いますが、こういった国際化や、先ほどの Art も含めた S T E A M 教育の分野で、少し国際バカロレアの話と違っていたら申し訳ないのですが、そういう特色ある、ないしはしっかり目的・目標を持った若者に対する、短期での受験勉強を中心にせざるをえないカリキュラムではない学校、学びの機会を用意するということが意義があることではないかと思います。

(委員)

国際化の時代に、国際バカロレアというグローバルな人材を育てていくという機会があるというのはとても重要であると思っています。生徒にとって様々な選択肢があるということが一番大事だと思っています。少しずれるかもしれませんが、先ほど(能作委員が)おっしゃったプレゼンテーション能力が、一つの切り口になってくるような気もしています。砺波市でも砺波高校の生徒が、空き家について調べてプレゼンテーションをしてくれました。同じような感想を私も持ちました。プレゼンテーション能力が本当に高いのかという、つまりこのプレゼンテーションという一つの切り口を取ったとしても、グローバルな人材を求めている中で、小中高で、先ほどの、中高一貫教育にも繋がるわけですが、要は、その中高一貫校とかに行く前に、中学校から高校へという連携がまだまだ不十分なので、そこがクリアできていない限り、中高一貫教育、それをやることによってというスタートも

あるかもしれませんが、そこの面でプレゼンテーション能力一つを取ったとしても、連携をもっともっとやっていく必要があります。つまり、中学校から高校の授業を見に行く機会は、ほとんどないのではないかなと思って認識しています。逆に高校から中学校の授業を本当にどこまで見てきているか、あるいは乗り入れ授業ができていくかというそういった一つのステップをとることも、今の段階では大事ではないかというふうに考えています。

(委員)

国際バカロレアに具体的に詳しいわけではありませんが、この学校については、設置の目的・目標、入るとどういう学びができる、その先にどういう人材になれる、自分が入ってこうやってできるかということが結構はっきり出ています。こういう学校が富山にあることの意義とか、価値はあるのではないかというふうに賛成の意見です。課題を見ると、強く言えませんが、この課題、もしくは、先ほどの普通科の編制どちらにしても変化が必要です。時代に合わせて、教育の仕組みを作る側、そして教育を行う先生の側が変化しなければならないという心が一番大事なのかと思います。変化するのは結構大変だったり、うまくいくかわからない恐れだったり、手間がかかるという、いろいろなことがあります。このバカロレアの設置であれば、はっきりと課題が出てきています。国際バカロレアをしなくても、普通科のどこかなどを使い合わせて、仕組みと、そして仕組みを変えたら、間違いなく、現場の先生にも変化が求められると思うので、「そこに向かっていくんだ。」という、気持ちが非常に大事かと思います。このバカロレアは、少しハードルが高そうだなとは思いましたが、国際化は間違いなく日本は求められている国です。これからも食料確保の面でも、関わりを絶ち得ない、むしろ、資源を得ていかななくてはならない国になっていると思うので、なおさらに必要のある学校かと思います。

(委員長)

国際大付属高校も海外に、毎年20名とか30名行っており、国際バカロレアについても承知しているので申し上げますと、国際バカロレアについてはハードルが大変高い。例えば日本の学習指導要領とのマッチングがほとんど取られていません。もう一つは、国際語、日本語は国際語ではありません。本来このバカロレアは国際語、英語とフランス語とそれからスペイン語で授業をやらなければなりません。残念ながら、日本語で教えているコースもあるようですが、実際の国際バカロレアのイメージから言えば、国際語で教えないといけない、英語での授業です。それと学習指導要領とのマッチングが非常に悪い。それを最初に皆さんに申し上げてしまうと、意見が出なくなると思いましたので、申し訳ありませんでした。資料に黒丸で3つ課題が書いてありますが、外国語能力、一部日本語にするにしても大変な力が必要で、実際にこれをしている公立校もありますが、大体は東京のインターナショナルスクール、あるいは私立がしているだけで、しかも大変な、大学の授業料を超えるような授業料を取って行っています。国際化という意味では、一つ考えるべき選択肢なのではと思うのですが、これを実行するためには、ものすごく高いハードル、特に、高校の学習指導要領とのマッチングが完全には取られておらず、文科省の言い方も、その辺りが柔軟に対処できると言っているだけで、「こうしましょう。」や、「国際バカロレアに向けて中学校、高校の学習指導要領を変えよう。」というような雰囲気ではなさそうなので、非

常にハードルが高いというのは間違いないことだと思います。

(委員)

そういうのを伺うと公立高校がというのは、確かに括弧書きですね。ただ、今の学習指導要領とマッチしてないというのは、捉え方としては、そうではない教育のアプローチというか、人材育成、教育の現場の一つの形があるという点ではよいと思います。

(委員長)

このデュプロマプログラムは、国際バカロレアだと2年間です。3年間ではなく、まずその辺、その前に、中学レベルでということ、今の教育、日本の教育システムとはマッチングが非常に悪い形になっているのは間違いないです。いろいろとご意見いただき、国際化という意味ではおそらく、「こういう新しい試みをしたら。」というご意見をいただけたと思います。

それでは、欠席者のご意見を。

(委員：事務局読み上げ)

バカロレアについては全国の私学の間でも英語の人材の確保やエキスパートの招聘、予算創出など大変だと聞いています。よりグローバルな国際化を視野においた県立高校として、現在の進路状況を踏まえてバカロレアを進めるニーズがあるのでしょうか。留学できるように奨学資金援助なども必要です。まずは姉妹校間における限定した教科科目による単位認定を検討してはどうでしょうか。

(委員：事務局読み上げ)

富山県に公立の中高一貫校や国際バカロレア校を設置するとした場合、反対意見もあるでしょうが、ない場合のデメリットよりある場合のメリットの方が大きいと思います。他県にはある選択肢が本県にないか、あるいは、ほとんどないのは何か理由があるのでしょうか。過去の経緯を検証した後に設置について前向きに取り組めばよいと思います。このような新しい取組みに対して生徒数減少、教員不足が足を引っ張っていることは間違いありません。富山大学、金沢大学の教員を養成する取組みでは、リモート、デジタル技術を補助的に使いつつ、講義プログラムの相互乗り入れ、共有することによる講義単位の不足を補っています。高等学校においても高校間の効率的運用をさらに行うことによって、学校という場の簡易化、縮小化、小規模化、拠点の減少化を図り、授業の質の向上と多様化と、経費、人材の効率的運用ができるのではないのでしょうか。

(委員長)

それでは、教育長から一言いただければと思います。

(教育長)

ご多忙の中、この検討委員会にご出席いただき、毎回本当に活発にご意見をいただき感

謝申し上げます。この検討会を今年度3回開催させていただきました。1回目は、これからの県立高校に求められるものとはというような大きな視点でのご議論、2回目は職業科、今回は普通系学科・総合学科、そして様々なタイプの高校ということでありましたが、子ども達の意識や、関心をどうとらえるか、これからの社会に対応するために学ばせたい自身、教育というのはどういうものかなど、様々な観点からたくさんご意見をちょうだいしました。今年度の会議は今回で終わりとなりますが、来年度も引き続き、この検討会、回を重ねて議論を深めていきたいと思っていますので、委員の皆様方には引き続きご協力をお願いします。来年度については、内容として、令和2年度に開校した4つの新高校の状況の報告、生徒等へのアンケートの実施なども考えています。またこれまでご議論いただいた、県立高校のニーズ、今後のあり方に関して、中学生や、産業界の方、関係者の方、各方面の方のご意見を聞くアンケートの実施も考えたいと思っています。また定時制、通信制高校のあり方といったことも、議論として残っていると思います。こうしたことをやった上で、まとめのご議論をいただき、何とか最終的には取りまとめていきたいと思っています。大変課題はたくさんありますが、「変化を恐れずに」というお言葉を肝に銘じながら、しっかりと事務局としても、準備を進めて参りたいと思います。

(委員長)

最後に、委員長まとめとして、感想だけ一言申し上げたいと思います。教育について不思議だと思っているのは、一般論ですが、母集団が増えると、だんだんこう分かれていく。例えば単細胞生物から多細胞生物に、人間も様々な器官に分かれています。そうすると、今、母集団、生徒の数がどんどん減っている段階で、そして、だからこそということで、提供側の論理かどうかわかりませんが、小中高もどんどん数を減らしている。一方その中で、たまたまこう学科を増やしたいなどの色々な多様性を求めている。これは普通に考えると、どうなのだろうかと。むしろ、人数が増えているときは、多様化してということに意義があると思いますが、どんどん学生数が減っていく中で、一方こういうように、多様化を求めて、様々な複雑なシステムを入れていくということになると、先ほどご議論があった、中学、高校に行くときにどうなのか、そういうご父兄の方の心配もあるでしょうし、その多様性の多さに、ご父兄や、子ども達がついていけるのだろうか。小中高の数を減らしながら、こういった多様性を求めているのは、本当に一般論として論理的に正しい方向なのだろうかと、個人的には、かなり疑問に思います。あるいは小学校、個人的意見ですが、今年度の最後だから述べさせていただくと、それはやはり3年生までは、徒歩で通えるようにしてあげないとかわいそうではないか。それで、何学級も必要だったら4年生以上は統合校にして、中学、高校は通えばいい。提供者側の論理で小学校もどんどん低学年から統合して、スクールバスがないと駄目なような形にされている今のスタイルは、どなたがいつ決められたのか知りませんが、個人的には大変疑問に思っています。身近なところにやはり幼稚園、保育所、小学校低学年はないと駄目なのではないか。だから、教育問題について、色々な方々が色々なことをおっしゃるが、何を目的に、何が制約条件で、今、そちらの方向に動いているのかということについて、もう少し、文部科学省を始め、県のご担当、教育委員会の皆様が指針を打ち出さなければいけないのではないかと思います。個人的には、今、述べた通り、子ども達の数が減るのに、一方では多様性を求めるの

は、何となく間尺に合わないというような気はしています。

5 閉会

15時00分、議事が終了したので、委員長が終了を宣し、進行を戻した。その後、司会が閉会を宣した。